

郷土に輝く人々



養老町教育委員会

はじめに

養老町教育長 小 足 幹 雄

町民憲章に「この美しいふるさととは、先人のたゆまぬ努力によって、のび続けてきました」とうたわれています。この本には先人のなかでも、立派な功績をあげ、名を残した郷土に輝く人々が描かれています。常に希望を失わず困難を乗り越え、目的に向かって邁進された、その逞しい精神力や豊かな愛情が読む人の心をうちます。

こうした郷土に輝く人々の生きざまは、皆さんの今後の生き方に大いに参考となることでしょう。道徳の資料としても大いに活用されることを願っています。皆さんの校下にも輝く業績をあげ、郷土に名を残された方がたくさんおられます。それらの方々の功績を調べたり、まとめたりしていただければと願っています。



もくじ

はじめに……………	1
一、よいきよくをつくった山口俊郎……………	3
二、れんしゅうにはげんだ鬼面山……………	8
三、お年よりを大切にした人―源丞内……………	13
四、水害のなくなる日をゆめみた人―佐竹直太郎……………	18
五、苦難をのりこえて―薩摩義士……………	23
六、勉学一筋の国学者―田中道磨……………	28
七、公益につくす「大黒天」―渋谷代衛……………	33
八、養老線の開通に努力した人―立川勇次郎……………	38
九、郷土の開発を夢みた人―岡本喜十郎……………	43
おわりに……………	48

題 字 養 老 町 長 清 水 敏 郎 氏
表紙絵 日吉小学校長 桑原隆一氏

一、よい きよくを つくつた 山口俊郎としろう

山口俊郎は、明治めいじ三十四年（一九〇一）に 高田たかだ

ときわちよう常盤町で 生まれました。

この人は、小さいころから とても おんがくが
すきでした。

ある日、おんがくの じかんに、先生が、オルガ
ンを ひきながら たのしそうに うたを うたつ
て くださいました。それを うつとりと きいて
いた 俊郎は、

「ぼくも 先生の よう
に オルガンを ひきた
い。」

と、ここに つよく
おもいました。

その日の ほうかご
先生に おねがいして
オルガンに さわらせて
もらいました。そして
二じかんめに ならった



うたを 小さな ゆびで じょうずに ひきま
した。それを見ていた 先生は、たいへん びつ
り されました。

「俊郎さん、とても じょうずですね。」

と、おっしゃった 先生の ことばを わすれるこ
とが できませんでした。

そのご、俊郎は、おんがくの べんきようが し
たくて 東京へ とうきよう いきました。そして 東洋音楽学 とうようおんがく
校に にゅう学しました。しかし、俊郎には、がく
ふを かう お金も ありませんでした。しかたな

く たいせつに してい
た とけいを うつて
がくふを かった こと
も ありました。ふゆで
も 火ばちの ない さ
むい へやで まいよ
おそくまで きよくを
つくったりして ねっし
んに べんきようをし
ました。



俊郎の つくつた うたは やがて がいこくの
人びとにも したしまれるようになりまして。こ
うして、俊郎は、ゆうめいな さつきよくかにな
りました。

俊郎が なくなつた いまでも、さつきよくで
いただいたおかねは ようろうちよう 養老町に きふされていま
す。その おかねで かいかん 山口会館も たてられ、まい
とし、十一月に 山口俊郎の けんしょうさいが
おこなわれています。

二、れんしゅうにはげんだ鬼面山きめんざん

むかし、鬼面山きめんざん谷五郎というつよいすもうとりが
いました。

谷五郎は、文政九年ぶんせい（一八二六）、美濃国多芸郡みののくに たぎぐん鷺わしの
巣村す（今の養老町ようろうちようわしのす鷺巣）に生まれました。

小さいころの名前は、新しん一といいました。新しん一は、
生まれたときからからだが大きく、田うえやいねか
りなどのお手つだいをして、おとうさんやおかあさ
んをたすけました。

九さいになったある日、新しいいえにおきやくさまがみえることになりました。おかあさんは、山いもでとろろじるをつくり、ごはんをたくさんたきました。

「ちよつと、おとなりへいつてくるからね。」

おかあさんがでかけているあいだに、新一は、そのごはんをペロリとたいらげてしまい、みんなをおどろかせました。



大きくなつたある日、新一は、石をはこぶしごとをしていました。おとな三人でやつとはこべるくらい大きな石をかるがるとはこびました。そこをとおりがかった人が、

「すもうどりのべんきょうをしてみないか。」

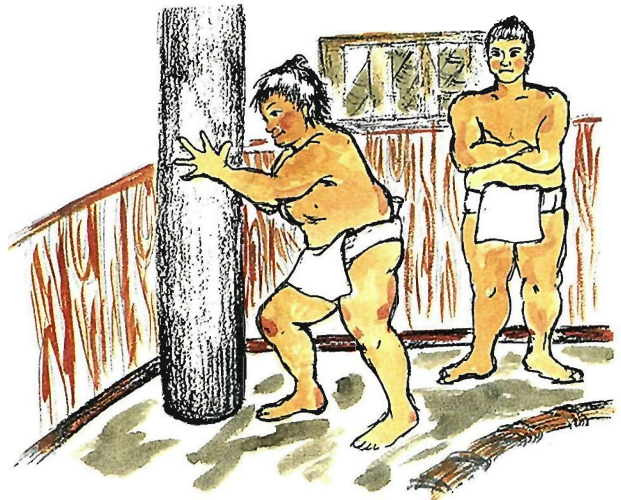
と、声をかけ、新一を江戸^{えど}へつれていきました。

れんしゅうは、あさ早くからありました。新一はねむい目をこすりながら、けいこにはげみました。はじめのうちは、あい手にぶつかっていてもはねとばされてばかりいました。でも、「なにくそ。」と、

はをくいしばっておき上がり、
とびかかっていきました。新一
は、みんなよりおそくまでしこ
をふんだり、はしつたりしまし
た。

だんだんつよくなり、三十二

さいのときには、鬼面山谷五郎という名まえをもら
いました。それからしばらくして、おとうさんがな
くなりました。谷五郎は、ふるさとにかえり、おは
かをたてました。また、はくさん驚巢の白山じんじやに、と



うろうをきふしました。そして四十四さいで横綱よこづなになりました。一八六センチ、一四六キロのからだは、仁王におうさまのように大きくて、とてもつよい横綱でした。でも、四十六さいのわかさでなくなりました。

まい年、なつ休みになると、鷺巣せんみ専明寺せんみょうじでお経きやうをあげ、鬼面山の供養くやうがおこなわれます。また、養老ようろう公園こうえんには、りっぱなけんしょうひがたてられています。

三、お年よりを大切にした人―源丞内げんじょうない

今から約千二百年ぐらい前のことです。

多度（今の養老）山のふもとに、源丞内という心のやさしい若者が、父親と二人で住んでいました。

父親は年をとり、体も弱かったので、あまり仕事ができず、家でねていました。

源丞内は、父親にかわって山へたき木を取りに行き、それを売ってくらしていました。

病気がちな父親は、お酒が大すきでした。いつも、源丞内がたき木を売ったお金でお酒を買って帰ることを楽しみにし

ていました。

ある日、源丞内は、いつもより山おくへたき木を取りに行きました。こけがはえている石に気づかず、足をつるつとすべらせてしまいました。源丞内は頭を打って、しばらく気を失っていました。プーンと酒のよいかがおりて目がさめました。

あたりを見ると、小さな泉^{いずみ}がありました。
「おや、酒のにおいがするぞ。」



源丞内は、おそろおそろ泉の水を両手ですくって飲んでみました。

「これは、ほんもののお酒だ。ふしぎだなあ。持って帰っておとうさんに飲ませてあげよう。」

源丞内は、ひょうたんいっぱいに酒を入れ、急いで家に帰りました。

「どうさん、お酒だ。飲んでみてくださいだされ。」

父親は、源丞内がさし出す酒



を飲みました。

「これはうまい。こんなにうまいお酒は飲んだことがない。」

と、父親は、にこにこしながら言いました。そこで源丞内は、きょうのできごとを父親に話しました。父親は、

「ありがたいことじゃ。お前のおかげで、こんなにうまいお酒が飲める。」

と、なみだをうかべてよろこびました。

次の日から毎日、源丞内は、泉へお酒をくみに行きました。父親は、そのお酒を飲むようになってから、少しずつ元気になつてきました。そして、源丞内といっしょに仕事ができるようになりました。

泉の話は、村の人たちに知れわたり、やがて村から町へと広がり、都の元正^{げんしょうてんのう}天皇のところまで伝わっていきました。天皇は、

「ぜひ、お酒のわく泉を見たいものだ。」

と、わざわざ奈良の都から美濃の国へおこしになりました。

村人から源丞内の話を聞いて、

「これは、親孝行^{こうこう}のほうびに、神からさずけられたものにちがいない。年よりをだいじにすることは大切なことだ。」

と、おっしゃって、年号を「養老」に改められました。

源丞内は、この地いきをおさめる役人に命じられ、父親といつまでもしあわせにくらしました。

四、水害のなくなる日をゆめみた人——佐竹直太郎

「ああ、また堤防^{ていぼう}が切れたのか。」

「大変なことだ。大事な稲^{いね}も家も

流されていく。」

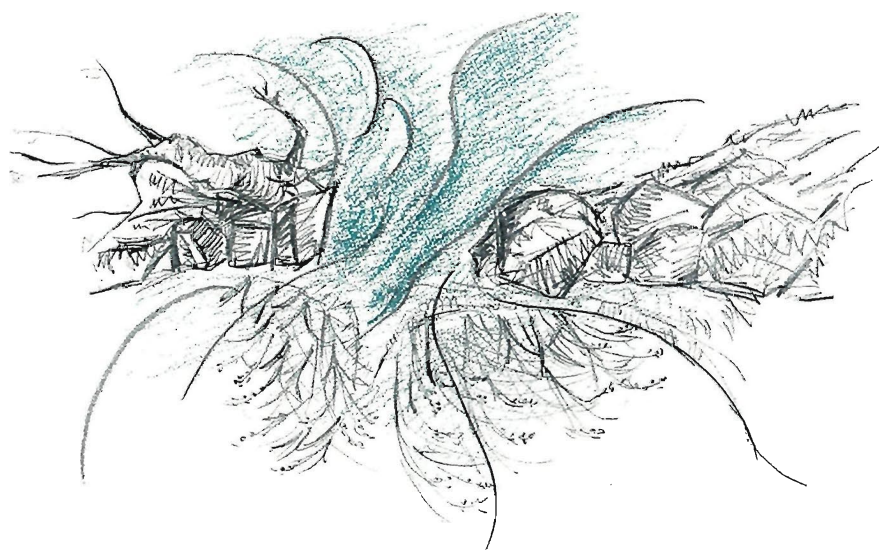
明治^{めいじ}二十九年（一八九六）直太

郎は、毎年のように切れるあばれ

川の水の勢^{いきお}いをながめながら、大

きなため息をつきました。

牧田^{まきだ}川は、川が短くて急な流れ
のために雨が降^ふると一度に水が出



て、石や砂すなを一緒いっしょにおし流します。しかも五日市いつかいちのあたりから二つに分かれて、島田しまだ・直江なおえあたりで合流していました。また烏江からすえでは特に川はばがせまくて、杭瀬川くいせと合流していたので、いつも水があふれて洪水こうずいになりました。

直太郎は、水害のない住みよい町にするにはどうしたらよいものかと、くる日もくる日も考え続けました。

「牧田川を早くなおして、水害から人々を救すくおう。」

そう心に決めた直太郎は県会議員けんかいぎいんになり、あばれ川によって作物や家までも流されるいたましい様子を、何回も議会で訴えうったました。

昭和三年（一九二八）には、国会議員に当選とうせんして、牧田川

をなおすようにお願いねがしました。そして要望ようぼうがかなえられるように、何度も県や政府へ足を運びました。

「そうだ。わし一人の力では、どうにもならない。村人たちみんなでたのみに行くでしょう。」

直太郎は、牧田川一帯いったいの人々に協力きょうりよくしてもらおうと、毎日話して回りました。

「わしらの村は水害にあわないからいいぞ。」

「こちら側がわだけ、じょうぶにしてくれんか。」

「工事をすると、わしらがあぶなくなる。」

という声もありましたが、直太郎は牧田川全体の洪水をなくさなければ、人々の生活は豊かにならないと話しました。ご

はんを食べる時間も、ねる時間もおしんで説き歩くことさえ
ありました。

その結果、牧田川と関係の深い養老町や大垣市の人たちの
賛成もえられて、「牧田川下流改修促進会」がつくられまし
た。一日も早く実現してほしいと思っている人たちからの熱
心なおうえんを受けて、直太郎は、県や政府へはたらきかけ
ました。

そして、長い苦心の末、昭和六年（一九三一）にやっと県
の工事として進められるようになりました。直太郎が、思い
たつて三十年目のことでした。

この工事で牧田川はまっすぐにになり、水の流れもよくなっ

て、洪水の心配も少なくなりました。また用水も引けました。

直太郎は、昭和二十年（一九四五）に七十六歳さいでなくなり
ましたが、工事はその後も続けられ、牧田川と杭瀬川の分流
は昭和二十五年九月にやつと完かん成せいしました。

現在、高田橋のたもとに、「治ち
水有譽すいゆうよ」ときざまれたけんし
う碑ひが、よく実った田を見守る
かのように建っています。

そして、毎年九月一日に、け
んしょう祭が行われています。



五、苦難をのりこえて―薩摩義士

「おうい。また切れたぞ。早くにげろ。」

昔から、木曾・長良・揖斐の三川が集まる地いきは、大雨がふると洪水になりました。そして、そのたびに農民は田畑を流され、とうとい命までうばわれました。江戸時代には今のようない堤防もなく、三つの川は、あみ目のように結びついていました。農民たちは、この大水害をふせいでもらいたいと何度もお上に願い出ていました。

宝暦三年（一七五三）になって、幕府は、木曾・長良・揖斐の三川を分流するための工事を薩摩藩（今の鹿児島県）に命じました。

この命令（御手伝普請）を聞いた薩摩の武士たちは、

「三百里もはなれた、えんもゆかりもない美濃の国の工事をどうしてし

なければならぬのか。」

「そんな命令にしたがうよりはいさぎよく戦った方がよい。」

と、いろいろな意見を出しましたが、家老かろうの平田鞆負ひらたゆきえは、

「命令を断つて藩をほろぼすより、同じ日本の国の人たちが長いあいだ洪水に苦しんでいるのだ。命をかけて助けるのが薩摩武士ではないか。」

と、自分の考えを話しました。みんなもなるほどと思い、この工事を引き受けました。

次の年の一月に、平田鞆負そうふぎようを総奉行とする千余人よもの薩摩の武士たちが治水工事ちすいにやってきました。武士たちは、なれないくわやかかけやをにぎつてくたくたになるまで働きました。

とくに大へんだったのは、大樽川おおぐれの洗ぜき工事と、油島あぶらじまのしめ切り工

事でした。川の工事としては、日本の歴史れきしのうえでは、今までにないほどの大事業だったのです。

「いったんひき受けたからには、薩摩藩としては、石にかじりついてもやりとげねばならない。」

「揖斐川の川底が二メートル余り低いため、木曾川の水がたきのようにうずをまいて流れこんで来る。

大きな石をしずめろ。」

「だめだ。流されてしまう。」

「では、石舟を出せ。」

たくさんの石を積んだ古い舟をこ

いで行き、舟に穴をあけてしずめることは、命がけの仕事でした。



戦いならひけをとらない薩摩武士たちも、水と土が相手のきびしい仕事で、しだいに体も弱って伝染病にかかり三十数名が死にました。

その上、幕府の意地わるい監督かんどくの目が光っていて、一日として心の安まる日はなく、幕府の役人と意見が合わなかったためや、工事のやり方についての責任をとって、切腹をした武士は五十数名にも達した程でした。

こうした苦勞の末、完成した治水工事を見て、幕府の役人は、

「ほほう、これは、みごとでござる。」と感心し、しばらくそこを動かなかった

たと言われています。工事の総指揮きをとった平田鞆負は、工事の検査が無事

おこなわれたことを、国元くにもとへくわしく書いておくりました。そして、薩摩藩

の多くの財と人命を失った責任を感じ、辞世じせいの句を残して切腹しました。

養老町では、毎年四月と八月に薩摩義士の遺徳いとくを偲しのび、偉業に感謝す

る顕彰祭けんしょうさいが行われています。



六、勉強一筋の国学者―田中道磨^{みちまろ}

「茂七、もういいかげんに明りを消せ。」

今夜も番頭さんは、茂七をしっかりとしました。

茂七は、享保九年^{きょうほうねん}（一七二四）飯ノ木村^{はんのきむら}の農家の子として生まれました。

茂七は、本を読むことが大好きでした。大垣の俵町にある「平流軒」という本屋で小僧として働いていました。子どもにとって、本の運搬や整理はとてもつらい仕事でした。その仕事は、夜おそくまで続くことがありました。どんなにつかれていても、寝る前には、大好きな本を必ず読むのでした。周りの人は、こんな茂七の姿を見て「本の虫」と呼んでいました。しかし、茂七は、もっともつと本を読む時間がほしかった



のです。

そこで、茂七は本屋をやめ、故郷の飯の木で屋根ふきの仕事や土木の仕事をしました。それは、どちらも厳しくつらい仕事でした。それでも、毎夜、あんどんのあかりで本を読み続けました。

この時代は、徳川八代將軍吉宗のころで、世の中は平和で学問がたいそうさかんになってきました。

このころ、茂七は、名前を庄兵衛と改めていました。

庄兵衛は、学問に励むうちに、「何とかして、立派な先生に教えてもらいたい。」そんな思いを、日ごとにつのらせていきました。

そこで、庄兵衛は考えました。そして、「かごかき」になることを決心しました。それは、多くの旅人に出会い、世の中のようにすがわかんと思つたからです。

ある日、庄兵衛は、客となつた旅人から、おうみのくにひこね近江国彦根に「おおすがなかやぶ大管中養父」という立派な学者がいることを聞きました。

かごかきとなつて、学問の師を求めている姿に、大いに感動した大管中養父は、庄兵衛をあたたかく迎え入れてくれました。それは、庄兵衛が三十四歳のときでした。学問にはげむ庄兵衛の名は、多くの学者に広く知れわたるようになりました。

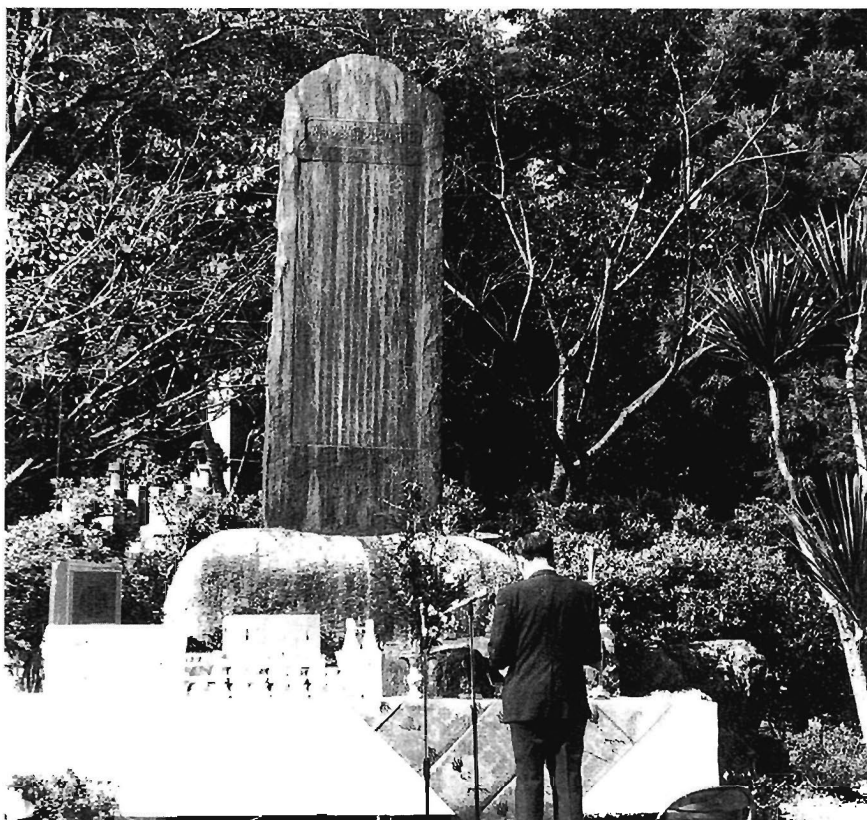
やがて、大管中養父の紹介で、とうとうみ遠江のかもまぶち賀茂真淵という国学者から教

えを受けることになりました。そのころ、庄兵衛は、名前を道磨と改めていました。道磨の学問は、いよいよ深まりと広がりを見せ、わが国の著名な国学者として世の中に認められていきました。

道磨は、四十八歳の時、名古屋で国学の塾じゅくを開きました。道磨をしたって集った弟子は、約三百人にもたつしました。

当時、国学の第一人者である本居宣長もとおりのりながを知った道磨は、ただちに松阪に行き、自分より六歳年下の宣長に「弟子にしていただけでしたら、学問一すじに打ちこみます。」とちかいの言葉を書き、弟子入りをさせてもらいました。

以後、万葉集研究書を十七冊あらわしました。これらの著書は、学問としての質が高く、当時の国学者達も感動し、ほめたたえました。後の世の国学の発展に大きな業績を残しました。



道磨は、天明四年（一七八四）十月四日、六十一歳でなくなりました。

道磨をたたえる碑が、飯の木イヌキの源氏橋にあり、毎年、命日には顕彰祭が行われています。

七、公益につくす「大黒天」——だいえい渋谷代衛

幕末から明治の中頃にかけて、「大黒天」と呼ばれている人物がいた。旧多芸郡大野村（現在の養老町大野）の農民である渋谷代衛がその人である。

「大黒天」といえば、右手に打出の小づち、左手に大きな袋をもち、米俵の上に乗った、あの有名な七福神の一人として知られている。代衛はその体も大きく、顔もまるまるとしていて、もし頭巾をかぶせるなら、見るからに「大黒天」と呼ぶにふさわしい姿だった。だが、彼が「大黒天」と呼ばれた理由はそれだけではなかった。

「粗末ながら、わしの別邸を校舎として使ってください。」

「どうか村の子供たちのために先生をやってくださいませんか。」

代衛は教師を集めていた。明治五年（一八七二）

学制が發布されて制度はできたものの、当時学校の建築費など、政府をはじめ県も村もなかなか出せない状態であった。

「ぼやぼやしていたのでは、この村が時代にとり残



されてしまう。なにより、せつかくの機会がありながら勉強できないのでは、子供たちがかわいそうではないか。」

校舎を提供した代衛は、自費で教師も集め、また数十人もの子供たちの本や筆記用具までも準備した。こうして明治六年（一八七三）、立心第三学校^{りっしん}が開設されたのである。

「さすがに代衛さんじゃ。」

「まったくじゃ。うちの孫もそれははりきっておるぞ。」

村人たちの感謝の声と子供たちの歓声とを遠くに聞きながら、しかし、代衛は頭を痛めていた。それは、毎年のように村を襲う水害のことである。いや、自分の村だけではない。輪中地帯であるこの周辺一帯は、すべて同じ水害の脅威にさらされているのが現状であった。

「水防の組合をつくって、どの村も協力し合って水害から身を守らなくてはいけない。時代も新しくなった今こそ、古いしきたりや争いを捨てて、どの村も心一つにしなければ……。」

代衛は自分の村内はもちろん、他の村々へも出かけていき、自分の考えを説いてま

わっていた。

「うちの村は今までのやり方で十分だ。」

「とてもよその事まで手がまわらない。」

「いくら代衛さんのいうことでも、そう簡単にはなあ……。」

「何か得することはあるのかな。」

時代は確実に変わっていく。損得の問題でもないのだ。現に代衛は、幕末以来、私財を投じて村の堤防の修理にも毎年あたってきている。代衛は何度も足を運んだが、話し合いは進まなかった。

「協力は無理なのか。いや、そんなことはない。将来必ず、どの村のためにもなることなのだ。」

代衛は説得を続けることにした。その間も、堤防の修理や被災者の救済には、進んで協力することを惜しまなかった。

やがて十余年後、代衛の水防への願いは、いくつもの堤防組合水利土功会という形となって実現した。村人たちは改めて、代衛の先見の明をたたえあうことになったのである。

明治十二年（一八七九）、この代衛に知事から、

「全国に名高い『養老』の地も、今のままではただの荒れ果てた山で終わってしまう。何とかここを開発し、一大公園にできないものだろうか。」

と相談がもちかけられた。

代衛は、早速郡内をかけまわった。

「今、世間では高価な書や絵画がたいそう流行^{はや}つておるそうじゃが、わしは『生きた絵画』をぜひとも買いたいと思う。わし一人の財力では買えぬ。どうか力を貸してください。」

呼びかけに集まった仲間とともに「偕^{かい}楽^{らく}社」を

結成した代衛は、知恵と財力をふりしぼり、道を開き、橋を整え、池を造って、その周りに桜や楓^{かえで}を数万本も植えていった。

「これぞ『生きた絵画』じゃ。」

疲れきった体で立ちつくす代衛の前には、天下



の名勝「養老公園」の礎が鮮やかに広がっていた。

晩年、家財を使い果たし、病気で寝起きもままならぬ代衛を濃尾地震が襲った。この震災で住まいまでなくした代衛に、人々は改築の援助を申し出た。しかし、代衛はそれを断り、崩れた家の木で質素な庵を建ててそこに住んだ。

代衛の知恵をかりようと、その後も庵を訪れる人が絶えなかったとか……。

代衛の没後七年がたった明治三十六年（一九〇三）、彼をしのび、彼の徳をたたえようとする有志の手で顕彰碑が建てられた。それは、養老公園の静かな木立ちの中で今もひっそりと代衛の業績を伝えている。

「身は貧乏なるも他人をして富ましめんと欲す」——その生きざまこそが、まさに「大黒天」そのものの一生であった。

八、養老線の開通に努力した人——立川勇次郎

「わあつ、来た。来た。」

「汽車が来た。」

数日前から駅舎は、養老鉄道開通を祝うアーチでかざられ、人々は、よろこびにわきたっていた。

二年間にわたる敷設工事で、日ごとに延びていく線路に沿線の人々は、どれほど今日の開通を待ち焦がれていたことか。それは、勇次郎ひとりだけではなかった。

黒い煙を吐き出し、白い蒸気をふきつけながら頑丈な鉄の塊が轟音^{ごうおん}をたてながら進んで



きた。初めて汽車を目にする群衆は驚き、歓声をあげた。

菊水神社からひいてきた線路わきの給水塔から水の補給を受ける機関車を勇次郎は、満足そうに見つめていた。そして、この日までにのり越えてきた苦難も忘れ、これからの希望にいつそう胸をふくらませた。

立川勇次郎は、文久二年（一八六二）大垣に生まれた。幼小の頃から向学心に燃え、法律学を修め、弁護士試験に合格。明治十九年（一八八六）東京で法律事務所を開いた。

そして、仕事を続けるかたわら、

「これからの日本を発展させるには、輸送手段を近代化することがかんじんだ。それにはまず、鉄道を新設することだ。」

と考えていた。

当時、東京市内の主要な交通手段は、鉄道馬車であった。そこで、東京電気鉄道敷設や川崎電気鉄道



開業に意欲を燃やすと共に、郷里西濃にも開発の灯をつけようと考えた。しかし、日清戦争直後の不安定な経済事情から着工に手間どってしまった。

ようやく明治四十四年（一九一〇）資本金百五十万円で養老鉄道会社を創設し、翌年からさつそく線路用地買収に着手した。だが、

「先祖伝来の土地を簡単に売るわけにはいかない。」

さらに、客馬車や人力、舟運に従事する人々は、

「客をとられて生活できなくなる。」

と、反対する人が多く、交渉は容易に進まなかった。

しかし、勇次郎は昼夜を問わず、鉄道の必要性を説いてまわり、沿線住民の理解と協力を得ようと精力的に働いた。

大正二年（一九一三）七月三十一日、ようやく大垣―養老、大垣―池野間を走る蒸気機関車の姿を養老駅に迎えることができた。大正八年（一九一九）には、桑名―揖斐の全線が開通した。しかし、勇次郎は、それだけでは満足せず、かねての計画であった電気鉄道の実現をめざして、大正十一年（一九二二）揖斐川電気会社と合併した。翌年、全線電化工事が終わり、汽車に代わって登場した電車は、大垣―桑名、大垣―

揖斐の緑野をぬってはしった。

「長く山間に埋もれた養老の景勝が広く世に出て、きっと遠くの人も来やすくなる。」

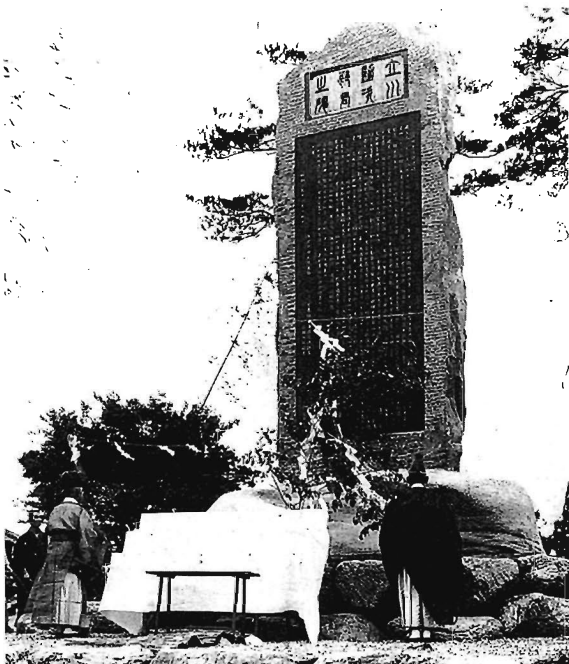
「これで大垣や桑名へ行きやすくなり、沿線の産業が発達するにちがいない。」

という人々の声を耳にして、勇次郎の喜びはふくらんでいった。

勇次郎は、時代のなりゆきを見抜く鋭い確かな力の持ち主であった。そして、その強い信念と堅い意志をもってさまざまな障害をのり越え、次々と大事業を成し遂げていったのである。

また、勇次郎は他人に対して温かく優しい人柄であった。忙しい仕事の合い間には、園芸、謡曲なども楽しんだ。

今、近鉄養老駅前の小公園に、巨岩の顕彰碑がたてられ、毎年八月に遺族を迎え、顕彰祭が行われている。



勇次郎の略歴

文久二年（一八六二）

大垣に生まれる。

明治十九年（一八八六）

東京で法律事務所を開く

明治二十二年（一八八九）

東京電気鉄道の敷設許可を出願するが許可を得られず、各方面の有識者を訪問し、電鉄敷設の重要性を説いて回る。

明治二十九年（一八九六）

川崎電気鉄道（後大師^{のち}鉄道↓京浜鉄道と改称）建設運動に参画、翌年敷設許可を得る。

明治三十一年（一八九八）

東京白熱燈製造（現東京芝浦電気）の取締役として経営に参加し、電気機器の製造普及に努める。

明治三十六年（一九〇三）

東京電気鉄道を東京市街鉄道と改称後再出願し許可を得て開業する。

明治三十七年（一九〇四）

大師鉄道開業、東京―大阪間に高速電気鉄道を企画する。

明治四十四年（一九一一）

養老鉄道株式会社を創立し、社長に就任する。

大正二年（一九一三）

大垣―養老、大垣―池野間の運輸営業を開始する。

大正八年（一九一九）

桑名―揖斐の全線が開通する。

大正十一年（一九二二）

揖斐川電気会社と合併、翌年全線電化工事を終える。

九、郷土の開発を夢みた人―岡本喜十郎

「この風光明媚^びな土地を、何とか開発できないものか……。」

岡本喜十郎は、毎日養老山麓へ足を運び、眼下に広がる平野を眺めながら、郷土開発の夢をふくらませていた。

ある晩、喜十郎は家族の者に、

「養老で景觀の最もすぐれた字^{あざ}松原の土地、四反二十八歩（四十一アール）を購入し、養老開発の拠点にしたい。」

と、自分の夢を話した。それを聞いた父は、顔を真っ赤にして激怒した。

「このところ家業に身が入っていないと思えば……。養老の開発だと。そんなことは、お役人に任せておけばよい。土地を買って何ができる。せいぜい世間の笑い者になるだけだ。」

「お父さんの言葉に間違いはない。そんなことで生活ができると思うのか。なあ喜十郎や、それよりもお父さんに紙屋の商いを教わって、この家業を継ぐことを考えておくれ。」

母は哀願するように口をはさんだ。喜十郎も家業を捨てて、海のものとも山のものともわからない事業を興そうとするのだから…。父や、家族の落胆が一挙に怒りに変わっても無理のないことだとわかつていた。しかし、周囲の反対が強くなるほど、喜十郎の夢は大きくふくらみ、やがて父も「家業の紙屋を継ぐこと」を条件に、寛延二年（一七四九）ついにその土地四反二十八歩（四十一アール）を買い受けることを承諾したのである。

喜十郎は、家業の紙屋を継ぐかたわら宝暦年間（一七五一―一七六四）に至ってやっと、四反二十八歩のあの土地に、一棟の小屋を建てたのである。

とき、あたかも元正・聖武両帝のご臨幸から一千年にあたるというので、その小屋を「千歳楼」と命名した。そして、ささやかながら旅館の経営をはじめたのである。

しかし、喜十郎は、何か物足りなさを感じた。「景觀もよい、四季それぞれにすてきな姿を見せてくれる大自然があるというのに……。」通いなれた山道を歩きながら考えた。

春霞のかかった眼下に広がる景色は、このうえなく美しい。れんげ畑は、薄紫色のじゅうたんを敷いたようだ。蜂がみつを求めて群をなし飛んでいる光景が目につかぶ。

喜十郎は、歩みを止めて、かたわらの大きな木の株に腰をおろした。そして、たもとからきざみを取り出し、それをきせるにつめ、火をつけようとしたとき、強烈な香りが鼻をついた。

足もとには、小さな白い花をつけたごくだみが風にゆれていた。たもとの先が触れ香りを発したのだろう……。と彼は思った。



「そうだ。薬湯だ。ここは薬草の宝庫といわれる伊吹山も近い。風光明媚な条件にこの薬湯があつたら……。一石二鳥とはこのことだ。」と、道ばたの一本のごくだみから喜十郎は薬湯経営を思い立ったのである。

明和八年（一七七二）

養老の滝
の水と菊
水の双方
の水を用
いて、薬
湯経営の
許可を笠
松代官所
から受け
た。そし
て菊水神
社の近く
に小屋掛けをした。

薬湯を経営するにあたって、高田の紙屋を廃業し、私財をなげうちとりくんだ。『薬湯こそ養老開発に最も適した事業』と確信して創業したのである。



しかし、筆舌に尽くせぬ困難の中を、苦心に苦心を重ね努力したが労は報いられなかった。ついに、喜十郎は薬湯経営の不振を補うため、養老山中から産出する良質の火打ち石の採掘販売を思い立ったのである。安永九年（一七八〇）代官所の許可を得て、養老山中から産出する良質の火打ち石を江戸や大阪までも出荷するなど、養老開発のため東奔西走し、養老の薬湯は広く四方に伝えられていった。

安永四年（一七七五）に時の天皇は、このことをお聞きになり、養老の霊水を薬湯に用いられた。喜十郎は感謝状を賜ったと伝えられている。

このようにして、初代喜十郎が苦心さんたん惨憺創業の薬湯事業は、二代・三代と努力継承されたが、四代喜十郎の代に至って権利の大部分が人手に渡った。しかし、四代百年にわたる辛苦の経営は、やがて養老探勝の人々に憩の場を供し、養老公園の開設をもたらすところとなった。

おわりに

わたしたちの町、養老町は、緑の山、清らかな水に恵まれた歴史の町です。

わたしたちの、この美しいふるさとを、先人のたゆまぬ努力によって伸びつづけてきました。

この本には養老の地にくらす人々のしあわせを願って努力をした人々の生き方の一こまが書かれました。人間の最も美しい姿は、苦しさに耐えぬをくいしがりがんばる姿です。みなさんはその美しい姿を読み取ったことと思います。

みなさん、この本で郷土に尽くした人々のことを知ったら、さらに自分からすすんで養老町の自然や文化や歴史のことを調べてみましょう。きっと養老町のすばらしさに気がつくはずです。そして養老町に誇りを感じることと思います。

監修

田中育次

編集委員

伊藤 薫 稲川 幸雄 大矢美登里

北村 卓子 木下 憲正 佐竹 久子

服部 康夫 古市 鈴子 松永 芳子

水野 純子 山田 祥子

挿画担当

伊藤 恵子 近藤 静代 北条 英丸

高木 茂光

平成元年三月

郷土に輝く人々

発行 養老町教育委員会

